

消された古代東倭（東ヤマト＝東三河）は後期邪馬台国！？

前田 豊

1. はじめに

本報告は、東三河が『晋書』宣帝紀に記載された「東倭（東ヤマト）」即ち、魏志倭人伝に取り上げられた倭国の重要拠点（後期邪馬台国）の仮説を提言するものである。

本発表者は、日本列島の本州各地（神戸、広島、富山、埼玉、東京、豊橋、神奈川）に住むという経験があり、各地の固有の歴史に関心を持つようになった。特に東三河（愛知県豊橋市）や、富山の古代伝承の多さに関心を持ち、日本の古代史研究にのめり込んでいった。

「東三河邪馬台国説」については、既に、全国邪馬台国連絡協議会のインターネット・ホームページの「私の邪馬台国論」にも発表しているが、本論は、その後の情報をまとめたもので、「女王耆与（トヨ）」の治めていた「後期邪馬台国＝東倭」が、東三河にあった可能性の提言を行うものである。

特に、列島各地の豪族の持つ伝承や記録に注目し、古代出雲族や宇佐氏の伝承から、邪馬台国の情報を引出し、東三河との関連を紹介する。

また、筆者は富山に4年間住んだことがあり、高岡市の二上山に登って初めて、竹内宿禰の墓があることを知り、その伝承に関心をもった。その後、竹内睦泰（正統竹内宿禰73代）の『古事記の邪馬台国』、『古事記の暗号』などの書籍が発刊されたことを知り、その内容をベースに邪馬台国と皇統の謎を探ってみた。

一方、蘇我蝦夷による天皇紀等の焼失前の記録は、物部守屋一族、大中臣一族、春日一族、越前武内一族（九鬼文書）など4家において保存されていることを知った。これらの情報は、『記紀』以外の文書（偽書と言われる文献）にも反映されている可能性があるかも知れないと思っている。

2. 日本の古代における「東倭」の存在

古代中国の文献によると、日本列島に存在した倭人の国の呼び名に「倭」「大倭」「東倭」と呼ぶ国があったことが分かる。

「倭」は、倭人の住む地域の中でも、九州地方を指すという説が優勢である。では、大倭、東倭はどこであろうか。大倭、東倭は、畿内のヤマトと考える場合が多いが、筆者は、大倭は奈良を中心とした後期の倭国を表し、東倭とは、その中でも東地域にある、東海地方の倭（ヤマト）と呼ばれたところに比定したい。

それが、「消された古代東ヤマト」であるとして、東三河～遠州西部を想定している。（参考：前田豊著「消された古代東ヤマト」（彩流社、2003年2月発行））

ところで、「東倭」の記載があるのは、『晋書』宣帝紀である。これが初めて中国文献に現れたものであるが、邪馬台国論争で語られる機会は少ない。

『晋書』宣帝紀には、「泰始元年春正月、東倭、譯を重ねて貢を納む。焉耆・危須の諸国、弱水より以南、鮮卑の明王も、皆 使を遣はして来獻す。天子 美を宰輔に帰し、又 帝の封邑を増す。」と記載されている。即ち、魏の滅亡直後、泰始元年（265年）に、東倭の女王が西晋国に遣いを送った。この時期は、倭女王・卑弥呼の没後約18年経った時期で、邪馬台国の耆与（トヨか）が女王であった時代に朝貢を行ったと考えられる。

これに対し、日本の古代史解明を行う作家・小林恵子氏は、『古代倭王の正体』（新伝社新書、2016.2.10）の中で、「高句麗本記の東川王即位19年（245）の条に東海の美女を献上されたとある。東海とは列島の日本海

側にある塩を生産する土地の一つで、塩土老翁の国のことであり、『晋書』（泰始元年 265）に朝貢してきた東倭と記録されている国と思われる）」と記載している。

では、東海の塩を生産する土地で、塩土老翁の治める国とは、どこであろうか。

拙著『消された古代東ヤマト』において、東海とは、日本列島本州の南側中央の東三河と思われる、と記載した。東海で塩をつくる国としては、三河の吉良がで有名である。蒲郡の赤彦神社のご祭神が豊玉彦、豊玉姫で、海人族（安曇族）であり、塩土老翁を表している可能性がある。

豊橋市の吉田城址北の弥健神社に神武天皇の巨大銅像が立など、神武伝承が東三河に夥しく多くある。

豊橋市 柱町には塩釜神社がある。渥美郡西の浜に製塩遺跡が6か所ある。

豊橋市の塩釜神社は、武甕槌命・経津主神が東北を平定した際に両神を先導した塩土老翁神がこの地に留まり、現地の人々に製塩を教えたことに始まると伝えられる。

小林恵子氏の日本海側の国と推定は、東三河が丹波（丹後）国と繋がっていたことから、日本海側と間違えた可能性がある。

東三河の本宮山は、加久神を祭る天香山である。神武天皇伝承に現れる老翁は、椎根津彦であるが、塩土老翁とも言われ、東三河八名郡の六所神社ほか多くの神社に祀られている。奥三河の花祭りにも醜い老翁が出てくる。

東三河には、豊玉姫（蒲郡・赤彦神社）、豊受姫伝承（豊川市・豊受姫伝承）があり、新城市の篠谷八幡社は興止日女神社と呼ばれ、豊姫が祀られていた。豊川周辺に、天火明（ヤマトの宿禰）伝承に基づき、明治初期にヤマトという地名がつけられたことがあった。

即ち、東三河は、東ヤマト（東倭）と呼ばれてよい根拠が、多数存在していたのであった。しかし、東倭は、奈良の大倭が成立してから、持統天皇の時代に没落消滅させられることになる。

ところで、伊勢神宮の『神宮雜例集』には、「神服機殿神部等解申請利き宣の事」という文書がある。東三河特産の絹糸（神御衣御糸）が、天照大神への正式献上品であった理由を無視されているという苦情の文書であり、ある時期から、東三河のことが軽視され始めたことを伺わせる。その文言を以下に引用する。

「抑々神御衣御糸の事は令条に度々宣べし旨に仕え、三河国の赤引の神調の御糸をもって、織り奉るべきの由、干一紙に戴き、同言上を経るの処、未だ裁下されぬの条、目恐れ為し目愁を為す。

何者縦干式条に載せられずといえども、神事徹重の間申請に隋い、定め置く料所の例は幾ら哉況か。

神御衣の勤めに於けるは、掛けまくも畏れ多くも、天照坐皇太神高天の原に御坐されし時、神部等が遠祖・天御鉾命を以て、司と為し、八千々媛を以て織女と為し、織り奉るの間、御垂跡の跡、今を以て其の勤め、誠に嚴重の双なり。

これによって彼の国赤引御糸を以て、斎戒潔清め織り奉るべきの由定め置く所、神祇令を欠く隋、其の勤めを致し、自然に中絶。

而して麻積の機殿、御衣御麻の沙汰の次、三河の赤引糸をもって、織り奉るの由、寛く治め、両度の宣旨また以て明白なり。その中絶の仔細もつとも云えど、指したるを見るに・・・」

これによれば、高天原が、東三河にあり、天照皇太神が、おられた時があると読み取れるのである。

また、三河地方に、魏の皇帝の子孫が、雄略天皇の時代に大挙して移住していた記録が、「和妙抄三河国の大岡（大岡村）の項」にある。

「大岡忌寸（いみき）は、出自魏の文帝の後。安貴公である。
大泊瀬幼武天皇の御時四衆を率いて参った。男龍（辰貴）絵を善くせり。
小泊瀬稚ササギ天皇（武烈）その能を美で首姓を賜う。五世孫勒大耋惠尊亦工絵。
天命開別天皇（欽明）御世姓倭画師を賜う。
高野天皇（称徳）神護景雲三年 大岡忌寸の姓を賜う」と。

魏文帝（220-226）は、魏の初代皇帝でその子孫が、四衆を率いて三河に参った、というのである。大岡村は、現在の地名では見いだせないが、岡崎市の近く、安城ではないかと筆者は推定している。

いずれにしても、魏の皇帝は、日本列島の中部東海地域に親しみを持って、定着するに至ったのではなかろうか。

尚、東三河豊川周辺に、中条、下条などの地名と「為京」と呼ばれる地があり、古代の「京」とよばれた可能性が高い。その近くの麻生田遺跡から、300基近い甕棺墓（佐賀県吉野ヶ里遺跡出土と同形式を含む）が出土し、本州で最大の甕棺出土地となっている。また、牛窪記に記載されるように、徐福伝承地でもある。

南朝天皇の隠れ地域でもあるが、欠史八代天皇の「孝元天皇」が、御津から上陸来所されたり、文武天皇の御所が下条にあったともいわれている。持統天皇の三河行幸は、続日本紀に掲載されており、その来訪の理由が、不明とされている。東三河の古代史が伊勢神宮との関係で消し去られた可能性がある。

魏志倭人に記載の5尺刀？が念仏塚古墳や漢代の素環頭の剣が浪の上古墳から出土しており、三種の神器の草薙の剣を保管していた熱田神宮の大宮司も三河出身である。魏志倭人伝に記された邪馬台国への行程も矛盾なく説明できる地にある。

九州・奈良の地名と共通地名が多数あり（末尾添付図参照）、東三河は、謎の古代史を秘めた地域なのであった。。

3. 古代出雲および宇佐氏の伝承における邪馬台国情報

本項では、公平な出雲富家の歴史記録をとりまとめた、勝友彦著「親魏倭王の都一伝承の日本史一」から、邪馬台国に関連する情報を引用列挙する。

1) 出雲王国

イズモの伝承ではゾウの住む国から、クナト王に率いられて移動した。出雲族は古代インドのドラビダ人だった。ゴビ砂漠を越え、バイカル湖の近くから、筏でアムール川を下り、北海道に進み、津軽に上陸した。

縄文時代は出雲族が最も多く、ドラビダ語と古代モンゴル語が混じって出雲語ができ、それが基になって日本語が出来た。

製鉄法「タタラ」は、インド語の「猛烈な火」の意味で、事代主（=恵比寿）の時代（BC2世紀）タタラ五十鈴姫（村雲大王の后）の名がついた。

出雲王朝は日本海沿岸と四国を支配し、BC6世紀に成立し約700年続いた。

2王制で、主王を「大名持」（八耳王）、副王を「少名彦」（事代主）と呼んだ。

イズモ族は朝日を拝む習慣があり、奈良の三輪山の神は、事代主の娘が出雲から移した太陽神であった。

サルタ彦は、鼻が長い象神ガーネシャ由来で、鼻高彦ともいい、道の神となった。

注) 富士古文献によれば、出雲には新旧があり、旧出雲は、富士山麓、駿河、静岡（掛川小国神社）、三河（石巻、豊川付近）にあった。新出雲は、島根県を含む日本海側である。

2) 徐福の渡来

BC219年頃、出雲王国の海岸に秦國人の乗った構造船が着いた。穗日と武夷鳥たちは青銅器と銅鐸に似た編鐘を土産に持ってきた。これを参考に銅鐸が作られサナギと呼んだ。三河国西部の猿投山の猿投は銅鐸の古語である。

徐福の命を受けて渡来した穗日は、秦族とその頭の徐福が出雲国に来ることの許可を申出て、イズモに住み着いた。

翌年（BC218）、徐福の率いる大船団が石見国海岸に現れ、徐福たちが上陸した。徐福は和国に来てから、ホアカリ（火明）と称した。

第8代大名持の娘・高照姫が奥方となって、火明の処に住むこととなった。

生まれた長男が五十猛であり、大屋に住む。高照姫の兄・アジスキ高彦の娘・大屋姫も住み、五十猛と結婚、タカクラジを生む。

五十猛は、海香語山に名を変え、ニギハヤヒ（2度目の渡航後の徐福）の娘・穂屋姫と結婚し、海村雲をもうけた。

BC210年頃、秦に帰国した徐福は、再び童男女3000人と百工を連れて、九州有明海に入り、佐賀市諸富町に上陸して、和名・饒速日（ニギハヤヒ）を名乗った。

火明と饒速日は同一人物＝徐福（吉野ヶ里に住み、子孫が物部氏になる。三根郡物部郷神社の神明＝物部経津主神。伊都国の長官爾支はニギハヤヒ由来の呼び名）。

次男を彦火火出見と名付けた。香語山とは腹違いの兄弟である。

徐福は2回合わせて5000人以上の若い男女を和国に連れてきた。

3) 出雲人のヤマト（近畿・東海？）の開拓

東出雲（富家）の八重波津身（事代主）の御子・鳥鳴海が第9代大名持になった。没後、后・活玉依姫が実家の撰津三島（富の里）に帰った。

活玉依姫の御子・奇日方が三島に富王家の領地をつくった。その後、ヤマトの葛城（御所市）に移住した。登美家を神（カモ）と呼んだ。一部伊勢の椿大社にサイノ神を移し、移した人をイセツ彦と呼んだ。

奇日方は活玉依姫の子で、妹にタタライスズ姫とイスズ依姫がいた。（三輪＝甕、山の祭祀者）出雲西部の神門家は、ヤマトでは高鴨家と呼んだ。ここに大国主とその子アジスキ高彦と妹の下照姫がいる。

タカクラジは、紀の川河口に移住し、大屋姫神社を建てた。徐福持参の竹、梅を植えた。

丹波國（丹後）の海家がヤマトに行き、尾張家になった。尾張家から海部家が分かれた。

ホアカリー香語山ー村雲の系図（国宝）；村雲が初代・大王と認められた。

これが、天孫降臨話＝神武（磯城王朝）に利用された。

磯城→登美、尾張、高鴨家

村雲はヤマトへ移住。高尾張村から尾張家と呼ぶ。武埴安彦命が関係し、東三河に繋がる。

4) 倭国大乱を収めた天皇

後漢の桓・靈の頃（146～189）の乱は①奈良地方の豪族の覇権争い、②播磨、吉備、出雲の戦争、③第一次物部東征のことであった。

但馬にヒボコが渡来（2C、垂仁紀3年3月、豊岡、丹波を開拓、井石神社に祀られる）

ヒボコ勢が播磨を侵略→和国大乱（垣・霊の間：147-188）

吉備王国の勢力圏（平型銅剣分布は淡路の西から国東半島に及ぶ瀬戸内海沿岸すべての地域） 時代は、フトニ王（孝霊天皇）の頃のこと。大吉備津彦とカクツ吉備津彦が出雲を攻める。

AD1C頃筑後の物部勢力の指導者・五瀬は、弟・三毛野、稲飯と協議し、ヤマト地方へ進軍する。第一次物部東征時紀州で五瀬が戦死、代わってウマシマジ（五瀬の弟）が熊野に上陸する。ウマシマジ軍がヤマトに侵入するのは、175年頃。

神武天皇・イワレ彦の名前は、磐余の地名による。初代大王・海村雲の名前を隠し、記紀はイワレ彦に名前を変えた。

孝元（クニクル）大王は、物部勢力と妥協し、物部氏の娘・ウツシコメを妃として迎え、ヤマトの争乱を治めようとした。1C後半孝元大王は登美家のクニアレ姫を后とし、大彦と大日々（開化）とモモソ姫を生む。モモソ姫が三輪山の姫巫女で、第一次ヒミコである。

徐福にならない妙見信仰をもたらす（道教=鬼道の仏教化されたもの）。速玉大神は物部ニギ速ヒノミコト。

出雲王国が銅鐸祭祀を止め、物部の銅剣を出雲王国の新シンボルと決めたことで、大乱が終る。（垂仁天皇の時。）

5) 卑弥呼のこと

第1次卑弥呼は、モモソ姫。姫巫女の略称。

磯城王朝の大彦とモモソ姫は物部勢と対抗した。

親魏倭王のヒミコは、第2のヒミコで、宇佐宮の豊玉姫のことで、漢の霊帝・光和（178-183）に和国が乱れ、ヒミコを立てて王とした。

三輪山の姫巫女は、登美家か磯城家の姫しかなれない仕来りがあった。

大王家と尾張家は銅鐸祭祀を中心とする農耕神を祭る信仰であった。

物部勢力は鏡を祭る勢力である。

6) 狗奴国のこと

大彦は、物部勢や埴安彦と対立した。183年大彦勢は北を目指して退却し、記紀で賊として扱われる。尾張一族は初代・村雲大王の出身で、大彦と共に銅鐸祭祀を振興しようとした。

大彦勢力がクナ王国とみなされるようになった。

ヌナカワ別勢力は伊賀、伊勢を通過して、東海方面に転進した。サイノ神信仰の主神・クナト大神の国をクナ国と呼び、東海地方もクナ国である。

久努臣が魏書の久久智彦（狗古智卑狗）である。

7) 菴与とは

宇佐のトヨタマヒメ→第二のヒミコ。竜宮の乙姫にされる。

豊玉姫の子・豊彦はカガヤキエズに変えられた。

台与は豊彦の子・豊姫である。都万国女王・宇佐豊玉姫は、魏に朝貢し、印綬を受け取る。

ミマキ入彦王が、都万国に都を造り、豊国勢力と連合する。南薩摩のアタツヒメ（コハサカヒメ）を后として、イクメ王子（垂仁）を生む。

ミマキ王は後の没後、宇佐から豊玉姫を後の后として迎える。

邪馬台国の時期、東に磯城王朝、西に物部豊国王国があり両国が対立していた。

ヤマトの磯城王朝9代開化の次10代は彦坐王が大王になった。その王子達が後継者争いをした。兄・彦多都御子の勢力はサホ彦より勢力が大きかった。日子坐王の娘・サホ姫が三輪山の姫巫女を務めていた。(第3代ヒミコ)

そこに豊玉姫・イクメ王(垂仁)軍が東征を始める。

彦多都御子は丹波の亀山に根拠地を移し、丹波道主御子(第11代大王)と呼ばれた。

丹波道主王の御子が朝廷別王(第12代大王?)と呼ばれて東三河を治める。道主王の娘・ヒバス姫がイクメ(垂仁)天皇の後になる→イザナミのモデル。イクメ大王がイザナギのモデル。

丹後籠神社の海部氏は、海幸彦にたとえられ、物部氏の祖先は弟の山幸彦(ホホデミ)に例えられる。

8) 男王(卑弥呼とトヨの中間の祭祀王) : ミマキ王(崇神)かイクメ王子(垂仁)

難升米(なしめ) : 田道間守。「都市牛利」は十千根入彦のこと。

弥馬升は大日々大王の娘・御真津姫のこと。

弥馬獲支はミナムチ(水口)宿禰

武内宿禰は魏に朝貢したが、官位がもらえず、トヨタマヒメを裏切り、三角縁神獸鏡を400枚つくり、ヤマトの豪族に配る。

物部十千根「都市牛利」は熊野へ行き、出雲攻めの準備をする。

武内宿禰が帯方郡長官に、彦道主(コチヒコ)と戦闘中であることを伝え、クナ国男王と誤解させた。

9) 邪馬台国はどこか

ヤマタイ国は、東九州の都万國(宮崎県)、時期はモモソ姫巫女より後。

西都原が、第2のヒミコの居た地。

物部王国は都万王国とも呼ばれた。孝霊、孝元の時代、西日本の豪族は、西都原に住む。

ミマキイリヒコ王は、第2物部東征を計画するが、ヤマトへ行っていない。(ヤマト磯城王朝の10代大王彦坐王の時期に相当。)

物部・豊連合王国の女王として、宇佐トヨタマヒメが第2次物部東征を行なう。そしてヒミコは、ヤマトにいるように偽る。当時の中国の地図では、九州の南にヤマト國があると思われていた。

宇佐から物部イクメ王軍は瀬戸内海へ進軍(第2次物部東征)。遅れて豊玉姫軍船が続いた。この時魏からもらった銅鏡を豪族に配る。

豊国軍を率いる菟上王は、宇佐家の出身でウサギ神(月神)を振興していた。因幡の素戔神話が彼らによりつくられる。

注) 三河の菟足神社、近江野洲の兔伝承。豊国出身者は豊田、豊川、豊橋など「豊」の付く町に多く住んだ。出雲軍は旧豊国兵を北方へ追い払った。→上下毛野國、相模、師長、武蔵は出雲出身国造が出現。

記紀は第一次と第二次物部軍東征をまとめて、神武東征を創作した。

10) 卑弥呼の墓

第一次ヒミコの墓は、卷向石塚古墳(方突円墳)。木製品の年代は177年。吉備の古墳の影響を受けている。

宇佐トヨタマヒメは、安芸の国「え」の宮で没す。宮島に仮埋葬された。遺骨は、宇佐八幡奥山にある。豊玉姫の子・豊姫（13歳）に金印・紫綬が渡された（魏書の台与）。その子豊彦＝イクメ王（イサチ彦）は銀印青綬を受ける。

豊城入り姫は第4のヒミコ。（豊鋤入り姫＝ワカヒルメムチ・月神を祭る）→サホ姫・東国（近江・尾張＝三河）に追放された。豊彦は豊来入彦と呼ばれた。

1 1) 狗奴国のクコチヒコ

東海方面に転進したサイノ神信仰の主神・クナト大神の国をクナ国と呼ぶ。

東海地方もクナ国である。久努臣が魏書の久久智彦（狗古智卑狗＝彦道主王子）である。

魏の時代の狗奴国は「和妙抄」に書かれた遠江國山名郡久努郷（磐田）、駿河（静岡）を含む国である。

久努国は後に、物部勢に占領され、久努国造は物部氏が任命された。

後漢書に書かれた「女王国から東・・」は、モモノ姫巫女の磯城王朝のヤマト國の東方の意味。

ヌナカワ別は、伊豆に退去し、三島神社を建て、祖先の事代主を祭った。

記紀では、敗走した大彦勢力を蝦夷と呼んだ。

記紀では、根拠地のソネ山に因んで、ナガソネ彦（長脛彦）の名を与え、約150年前の、イワレ彦の敵に当てはめた。

以上が、古代出雲と宇佐氏の伝承（勝友彦著書による）である。興味深い情報が多いが、どこまで真実か？ここでは判断を控える。

3. 『正統竹内文書』とは

～竹内睦泰（正統竹内宿禰73代）の『古事記の邪馬台国』と古代豪族伝承より～

ここで、『正統竹内文書』について、概説しておく。

武内宿禰の子孫である竹内家には『正統竹内文書』という口伝が受け継がれている。これは日本の歴史書である『古事記』と深い関係を持っている。稗田阿禮に天皇が『帝紀』と『旧辞』を読み習わせたとあり、『古事記』以前に、2つの歴史書が存在していた。

大化の改新のとき、蘇我蝦夷がこれらを焼いて自殺したと言われるが、帝紀は現存している。武内宿禰の子孫の家に代々、『帝王日嗣』として伝えられてきたからである。これが『正統竹内文書』である。

『帝王日嗣』と『古事記』を比較すると、同じ内容もあれば、違いも多くあるという。

また、ほぼ同時代に成立した『日本書紀』は、国外（中国）向けに書かれており、様々な点で違いがみられる。

『日本書紀』記載の年代は、不老長寿を夢見る中国に、日本人が長寿であるかを知らせるために、はったりを効かせたようだ。武内宿禰は寿命300歳というが、これは、春秋暦と世襲名により解明できる。神武天皇や欠史8代天皇が寿命100才を超えるのも、春秋暦で解明できる。

更に、欠史8代天皇についての記録もかなり詳しく残っており、欠史などではない。

武内宿禰が生まれたのは、成務天皇と同じ年、景行天皇13年とされている。出生地は紀伊国で、父親は、第8代孝元天皇の孫・屋主武雄心命である。景行25年、成長した武内宿禰は、北陸・東方諸国の巡察を命じられた。その後、日高見の国を取ることを提言し、日本武尊が吉備武彦と大伴武日を補佐に、蝦夷を平定することになった。

武内宿禰第1世から、波多（羽田）、巨勢、平群、葛城、紀、若子などの氏が出たが、正統を継いだのは平群氏である。

武内宿祢の跡を継いだのが平群木菟宿祢、その子が平群真鳥、更に平群シビで、いずれも大臣である。その後、葛城氏、巨勢氏、蘇我氏が表舞台に出る。天皇（大王）家に対抗できるのは、大臣家の葛城氏だけであるという。蘇我石川宿祢、満智、韓子、高麗、稲目と竹内家の正統が受け継がれた。馬子がトップになり、聖徳太子が馬子に大徳冠の位を与えようとしたが、馬子は大王家の家来ではないと、それを拒否し、対等であるとした。

武内宿祢になるためには、霊嗣之儀式（大嘗祭に相当）が必要である。この時、武内宿祢の霊と布都御魂神の霊を降ろす。これの神は霊剣そのもので、物部系の神とされている。（→神武天皇にも降ろされた剣。）

『正統竹内文書』によれば、徐福は間違いなく日本列島にやってくる。その子孫が、神武天皇東征以前に、大和地方を治めていた安日彦と長脛彦である。

徐福の末裔は、一時的には日本列島のそれも大和地方（？）を支配していた。奈良三輪山で祭られている大物主は、長脛彦であるという説がある（戸谷学著書『オオクニヌシ』）

一方、ヤマトタケルを九州から東国まで列島平定のため飛び回らせたのは、武内宿祢であるという。

天照大神は、皇祖神で、太陽の象徴。これは世襲名（132代ある）である。天照大神と天忍穗耳命の子が、穂日、ニニギ、ヒコホホデミ、熊野樟日である。天照大神＝萬幡秋津師姫であり、天忍穗耳命との子が天火明命とその弟・日子番能邇邇芸命である。ニニギ尊に天神の命霊を授けて水徳国を治める役目を委ねた。

4. 正統竹内宿祢著『古事記の邪馬台国』における邪馬台国情報

1) ヤマトの国とは

那賀須泥毘古が治めていた地である。兄は安日彦（太陽神を信仰）。この兄弟は徐福の子孫との見解。

2人が治めていた大和に、スサノオの息子＝大年命＝ニギハヤヒ命＝火明命がやってきた。

そこに、神武が日向から東征し、都（AD57年）をつくる。ヤマトとはどこか（→奈良、東海？）

2) 倭国大乱

いわゆる、欠史八代天皇の時代、即ち、孝昭（即位140年）、孝安（157年）、孝霊（171年）、孝元（186）天皇4代の頃のことである。孝昭の名前は天押帯日子、大倭帯日子国押人という。ここに、「押す」、即ち勝っているという意味で名前を付けるのは、実は、負けている時のこと。

戦いの相手は「吉備」であり、兄の大吉備諸進命が軍事長官で本格的に戦った。

系図は、孝安－孝霊・大吉備諸進－若彦武吉備津彦（弟がヤマトタケル）－吉備津彦－吉備武彦と続く。

この欠史八代天皇の後半は、九州に逃れていた、という。

3) 大乱を収めた天皇

孝元天皇のとき、祭祀王をヤマトトモモソヒメ（母はオオヤマトクニアレヒメ）に変えることによって、即ち祭祀王を男から女に変えることによって、平穏が訪れた。

神武天皇の時の祭祀王はイスケヨリヒメ。懿徳天皇は兄の娘・天豊津媛命は阿礼比売で、懿徳と結婚して孝昭天皇が生まれる。阿礼比売は何代目かの天照大御神である。

孝元－大毘古命－建沼河別命（北陸と東国12道に派遣、会津で出会う）

孝元天皇は軽の境原宮で天下を治めた。

但し、孝元天皇は東三河御津から上陸したとの来所伝承あり。（三河国古跡考）

4) 卑弥呼とは

日巫女は夜麻登登母母曾毘売命（186年即位）、孝靈天天皇の娘で孝元天皇の妹である。尚、魏志倭人伝に、崇神天皇（弥馬升ミマシ＝ミマキ）（220）の祭祀王、垂仁天皇（伊支馬イキマ＝イクメ）（254）、弥馬獲支（ミマカキ＝景行天皇）が記載されている。卑弥呼は当初九州に居て東遷する。

卑弥呼の墓は、箸墓。

5) 壺与（トヨ）とは

トヨとは、豊鋤入日売命、即ち崇神天皇の娘である。

6) 男王（卑弥呼とトヨの間に立った男の祭祀王）

比古布都押之信命（竹内宿祢の祖父）。尚、ヒナモリは神主。

難升米（ナシメ）は屋主忍男武雄心命（ヤシオオケゴコロミコト）。竹内宿祢の父親のこと。（但馬守の説あり）

7) 邪馬台国

畿内全体が初期大和（邪馬台国）である。懿徳天皇の時に大乱で九州へ逃避し、邪馬台国は九州に移る。

孝元天皇の時に大和を奪還した。日巫女も九州から大和へ移動した。

夜麻登登母母曾毘売命の時は巻向の檜原神社が神殿であった。

即ち、纏向は邪馬台国、その前は九州が邪馬台国。壺与の時は、畿内より西全体が大和で、首都は飛鳥と呼びそれが巻向であった。

8) 狗奴国

後の南朝の菊池一族の菊池の首長がクコチヒコ。（富士山を含む駿河～関東か。）

9) 記紀の編集者は魏志倭人伝を知っていた。

記紀編集者は魏志倭人伝を知っていて、対中国政策で、何も記載しなかった。

系図の嘘、空間の嘘、時間の嘘がある。

② 天忍穗耳は天照大神の夫。ニニギ、ヒコホホデミ、ウガヤフキアエズは息子である。

③ 孝昭、孝安、孝靈、孝元は九州に逃げていた。

④ 時間的には、出来事を書くが、起きた時期をずらした。

本情報も、どこまでが真実か不明である。しかし、貴重な情報として判断は差し置く。

5. まとめ

邪馬台国時代の倭国統一の動きについて、各地に残る伝承をもとにして、統一の順番を推定すると、次のようになる。

① 伊勢地方に統一伝承が認められない。また、滋賀県の伊吹山周辺を饒速日尊が通過したと思われる伝承があるので、近江国→美濃国→尾張国の流れが浮かんでくる。

② 東海・関東地方で、饒速日尊とウマシマジ命が活躍している。ウマシマジ命は饒速日尊の長子であるため、統一の時期は早かったと推定する。よって、尾張国→三河国→遠江国→駿河国→関東地方と推定できる。

③ 陸奥国（東北地方太平洋岸）は日向からやってきたアジスキタカヒコネ命を伴っているために、統一事業の最後と思われる。

④ その後、東海地方の勢力と、吉備の勢力が共同して、奈良纏向遺跡周辺に帝都をつくったと思われる。

東海地方の東三河が古代東倭＝後期邪馬台国の仮説は、種々根拠があり、有力な説と考える。

参考情報

1) 宮下文書では、大国主命は、富士「高天原」の重鎮で、三河、遠江、駿河を治めていた。佐野原「古麻ノ宮＝小国神社」が本拠であった。遠江風土記伝は佐野郷の存在を明記。（加茂喜蔵著「富士の古代文字」）

2) 出雲には、旧出雲と新出雲があり、旧出雲は広大な24ヶ国（但馬、播磨、丹後、丹波、摂津、河内、山城、大和、和泉、紀伊、阿波、土佐、近江、伊賀、伊勢、若狭、越前、美濃、尾張、三河、遠江、信濃、駿河、伊豆）、新出雲は山陰の一小国のみで、架空のため物証がない。（原田第六著『銅鐸への挑戦』から）

3) 旧日向国は、伊都国を始めとする北部九州の数郡である。新日向国は豊と新日向の2国。大和朝廷による意図的出雲と日向隠しがあった。（原田第六著『銅鐸への挑戦』から）

4) 東三河原ヤマト(邪馬台国か)の根拠

人口論

1. 弥生時代晩期の人口密度が人口密度日本最大の地であった。
東北 50、関東 309、北陸 83、中部 281、東海 395、近畿 338、
中国 184、四国 158、九州 250、 全国 202 (人/100km²)

考古学的現象

1. 徐福集団定着の伝承地
豊川市に甕棺墓（吉野ヶ里と同様）の大量出土地があった。
徐福、徐福の孫が定住との伝承を記録していた。（牛窪記、牛窪密談記）
2. 銅鐸文化の濃い土地。三遠式銅鐸出土。
3. 倭鉄の生産地：高志小僧という植物の根から鉄が採れる）
4. 中国（漢代）の将官が持つ環頭の剣が出土（石巻1号古墳）、
五尺刀が古墳から出土。石巻神社に奉納されている。

歴史的事実

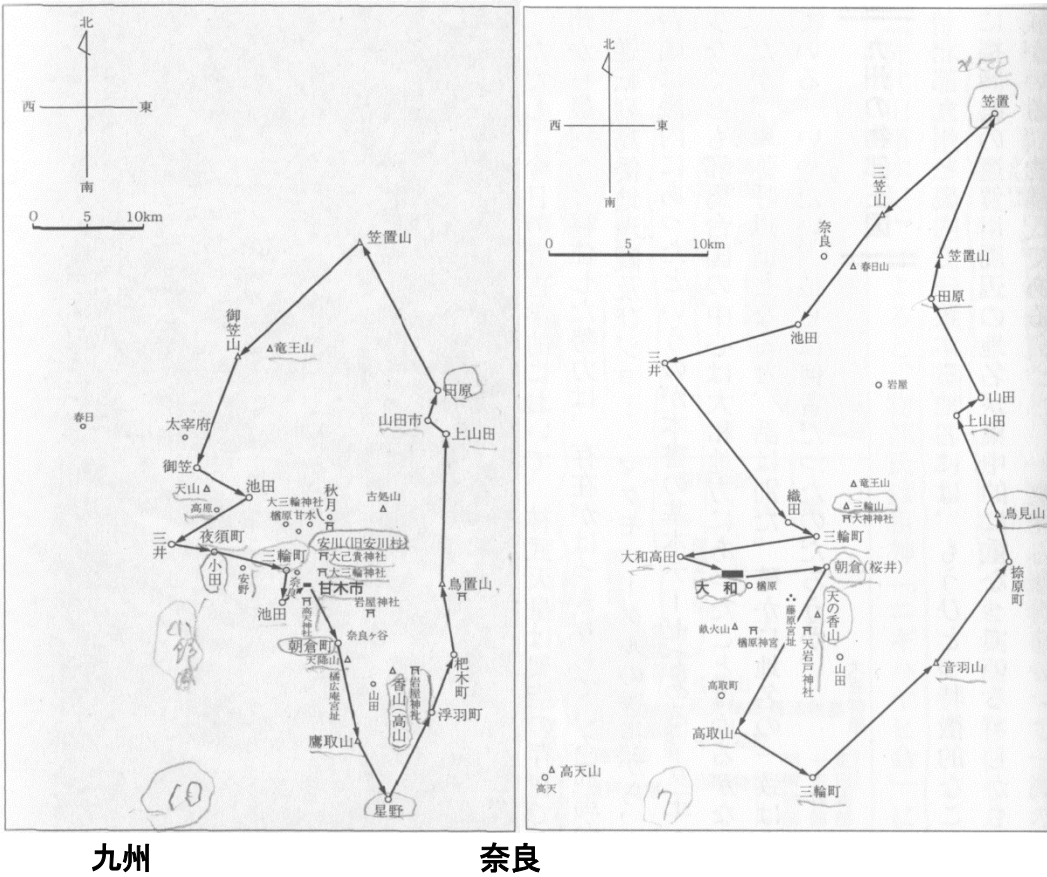
1. 魏の皇帝（文帝）の子孫が、大泊瀬稚武天皇（雄略朝、457年？）に四衆を率いて、三河の大岡村（大岡忌寸と称す）に來所定着（和名抄）
2. 東西文化の接点が大竜川で三河は近畿王朝の東拠点。（東の遠朝廷と呼ばれた、
垂仁・景行天皇のころ朝廷別王が統治）

宗教的・文化的現象

1. 天照大神誕生地の伝承（豊津）、真北に胞衣を埋めた伝承をもつ恵那山・恵那神社あり。
2. 伊勢神宮にニギタエを奉納する役割（服部神社、初衣神社）の拠点。
3. 高天原伝承：奥三河の霜月祭で「花祭り」がある。この中でこの地域が「高天原」であったと歌い上げる。
鳳来山（蓬萊山）あり。
4. スサノオ命、大国主命の伝承地。石巻山麓に大国主がスセリ姫に会い、スサノオの試練を受けて、矢を拾いにいきネズミの洞穴に入って救われたという伝承をもつ野矢神社がある。三河一宮のご祭神は大国主と事代主である。
5. 伊勢と奈良の繋がりが大。石巻山は奈良の三輪山の本山という伝承。三輪山宮司は豊橋から行っている。
6. ニギハヤヒ命の來所地。ニギハヤヒを祀る神社が本宮山周辺に多くある。

豊川周辺を大木食命（ニギハヤヒ 4 世）が統治し、後に石巻神社の神主になる。

7. ヤマトタケルの伝承が多い。白鳥の地名。
8. 持統天皇、文武天皇の来所地。斉明天皇来所。天智天皇（中大兄殿の古墳あり）、
天武天皇（大海、菟足神社、秦石勝）の伝承地。
9. 聖徳太子伝承地。鑑真和上来所。淡海御船、柿本人麿が国司として来所。等
10. 東三河の地名が、九州北部、奈良の地名と共通している。





- ① 安川
- ② 笠沙
- ③ 岩屋観音
- ④ 田原
- ⑤ 山田
- ⑥ 星野
- ⑦ 高山
- ⑧ 朝倉川
- ⑨ 三輪川
- ⑩ 小野田
- ⑪ 高原
- ⑫ 春日
- ⑬ 鳥見塚
- ⑭ 音羽
- ⑮ 池田
- ⑯ 大己貴神社
- ⑰ 鷹取
- ⑱ 岩戸神社
- ⑲ 八街
- ⑳ 岩座神社
- ㉑ 大宮

図 東三河の地名が、九州北部、奈良の地名と共通している。
豊橋、新城市に集中分布している

以上